

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(応用編)

第9回：思春期の厄介な言動への対応

「問題行動」と見えるものが、何らかの良い方向への変化の一つの表現型あるいは萌芽かもしれないという視点こそ、子どもに向き合う際には必要です。また同時に、誰が、何を、どういう理由で問題と考えているのかを、いつも整理しておくことが大切となります。

昔を振り返ってみると、私たちの世代でも、「決闘」と称した似たようなことが中学生の頃には見られました。ただ、そこにはルールが存在していました。一方が素手で、一方が道具をもって戦った場合、武器を持っている方が勝ったとしても、それは誰も「勝利」とは認めないというのも一つのルールでした。しかし、家庭内暴力やいじめ(学校内暴力)などにはルールが存在しません。

ちなみに、青少年の「問題行動」の歴史は古く、江戸時代の後期から幕末にかけては、博打、夜遊び、性的問題、打ちこわしなどの行動が若者によってなされたという記録があります。ただ、これらは当時としては決して問題行動と言われるものではありませんでした。幕末から明治にかけて、西洋から劣等国と見なされないように西洋文化や価値観を積極的に取り入れようとしたことに伴い、それまでのあまり問題視されてこなかった行動が法・制度上の「問題行動」として規定されることになってしまいました。

また、そのような青少年の「問題行動」に対して、当初は村落共同体で対処されていましたが、現代では教育・福祉・司法の領域で、矯正教育や処遇という形で対応されるものとなり、最近では精神医療の領域においても対応を求められるようになってきました。

本来、私たちは成長の途中で「悪」を少しずつ体験することを通して、それをどの程度まで取り込んだら良いか、出しても良いかを学ぶようになります。昔は、歩道側にまで伸びてきた枝になる柿やイチジクの実をとっては怒られたり、捕まらないように逃げたりするという体験の中に、盗る方も、盗られる方もそれなりのルール(公道にはみ出しているもののみしか狙わない、必要以上には取らない、捕まえて頭をゴツンとはするけれども警察や親には言わない)をわきまえていたため、その行為は絶対的な悪とはみなされませんでした。

子どもの発達という点から見ると、「盗る」、「盗りたいと思う」のは当然のことなんです。子どもらしい盗みの体験を重ねて得た知恵で、もう馬鹿なことはしなくなるんですね。その体験は、学問や技術を盗むことと、ある意味では同じなんです。

攻撃力についても同様で、私たちが生きていくためには攻撃力はあって当然のものですね。ただ、今の子どもたちは、子ども人口も減り、子どもに眼が行き届く環境にありますので、監視が行き届いています。しかも、その監視役である親は「悪」の経験が乏しい(あくまで筆者が育った時代と比較してですが)世代なんです。それでも、「悪」を体験して得た「悪」の意味を知っていればいいんですが、多くの親は「いい子」を育てようとして、単純な「いい子イメージ」を

子どもに押し付けてしまっているように思います。そのようなイメージを子どもに押し付けている親は、さぞかしいい子であったことでしょう。

このように、親の監視が行き届きすぎることにより、子どもは悪いことや失敗を通じて成長していく機会を奪われることとなりますので、爆発するエネルギーをコントロールする力を身につけることが出来ず、さらには経験不足のためにエネルギーの向け所も知らない、いわば「偏ったイイ子」に出来上がってしまうこととなります。

実は、家庭内暴力をふるう子は、そのほとんどが「いい子」だと言って間違いはありません。もともと、都会ではカエルをとってきて壁に投げつけて殺してしまい後悔するといった経験をする機会もないかもしれませんが、それもあってなのか、子どものためとあらば親は大金を投じて人工的な玩具(ゲーム機など)を買いますね。このことは、勉強のためといって塾に通わせたり、家庭教師を雇うことで問題が解決すると考えるのと同じことなんですね。これは親の怠慢と言えるのではないかと思います。

今の親は、自分は食べたいものを我慢してでも、子どもを塾や習い事に通わせるのがよい親であると考えている人は多いように感じます。これを“親心”だと思っているようですが、これは明らかに間違いで、これからの親は、「何か”をする」ことに対してではなく、愛情として「何か”をしない」ことに心のエネルギーを使うべきではないかと思います。その時々の子どもの“力”に合わせて、“このことについては手出しはするが、このことについてはジッと耐えて見ておく、というメリハリを持った対応の基準を持つことが子どもにとって最善をもたらす”ということを強く意識することが望まれます。